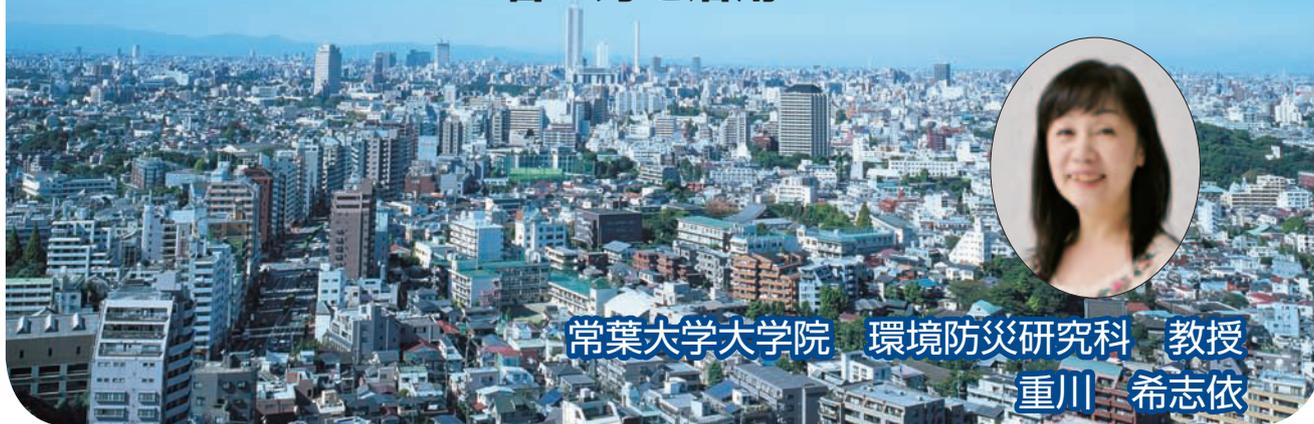


# 地域コミュニティの 防災力

連載 第35回

若い力を活用！



常葉大学大学院 環境防災研究科 教授  
重川 希志依

## 1. 若い力を活用して

私が勤務する大学には「防災」を学ぶコースがあります。学生にとっては、自らが社会の防災力向上のために地域で実践的な役割を果たすことは極めて重要な学びとなります。これまでも地元の中学校や高等学校の防災学習の場に学生が参加し、防災教育の指導者側の役割を果たす試みを行ってきましたし、大人を対象とした防災訓練や研修のお手伝いなどもたびたび行ってきました。指導する立場といっても補助的な役割を果たすにすぎませんが、それでも参加する学生たちにとっては、世代の異なる子どもたちとの交流の仕方や人を教えることの難しさなど、講義では得られなかった様々な知識を学び取る非常に良い機会となっています。中でも重要な学びは「自分自身の防災に関する知識の欠如」に気づくということです。人に対して1時間の話をするためには、その100倍、1000倍の時間を使って勉強し情報を集めておかなければなりません。そのことを身をもって感じても

らうことができるのは、自分が教える立場に立たされた時だと思います。

## 2. 学生が考える防災教育プログラム

本学の地元静岡県内のある市では、市と地元の高等学校が協定を結び「高校生ふるさとセミナー」というプログラムを行っています。今年度このプログラムの対象となった高等学校では、生徒に対して保育・教育・医療・地域などの講座を実施しており、教育・地域講座は防災をテーマに1年間取り組んできました。その講座の中で、高校生に対して防災の授業を行ってほしいという依頼を受けたのです。真っ先に頭に浮かんだのは、教員である私が授業を行うのではなく、高校生と年齢の近い学生に授業を担当させたいという事でした。参加する高校生と2～3歳しか年齢の変わらない2年生のゼミの学生に、講座の内容の組み立てから当日の講師役すべてを任せてみました。

# 地域コミュニティの 防災力 重川 希志依



写真1 学生が講師役をつとめる授業風景

阪神・淡路大震災以降、防災に関する教育教材は既に様々なものが開発されています。避難所運営ゲームHUG、クロスロードゲーム、防災すごろくゲームなどはその代表といえます。しかし、大学で防災を学ぶ学生が授業をするので、既成の教材は使わず、自分たちで考えたオリジナル教材を開発するところからスタートしました。しかし先に述べたように、教材を開発するほどの知識を学生は持ち合わせていません。そのため、過去の大規模災害を経験した人や組織の体験を読み考えることから始めました。体験はエスノグラフィー調査という方法を使い、私たちが阪神・淡路大震災以降、被災者や行政、ボランティアなど多様な属性の人たちに対して行ってきた聞き取り調査の手法で、こちらからは一切質問をせず、思い出すままに自由に話をしてもらい記録するというものです。阪神・淡路大震災で家族を失った被災者、東日本大震災で多くの仲間を失った消防団員、避難所運営でリーダー役を果たした被災者、住民からの苦情対応に忙殺され続けた市役所職員など、異なる立場の人たちの災害体験記録を読み、「ぜひ高校生に知ってもらいたい事、考えてもらいたい事」をテーマとしていくつか選定しました。高校の防災授業ではそのテーマについて参加者全員でより考えを深めてもらうことを目的としたのです。

当日までに用意した問題は、「災害遺構（震災

の爪痕)は残した方が良いか?残さない方が良いか?について考える」、「自宅が大きな被害を受けた時に学校などの公的な避難所に行くか?別の避難生活を選択するか?について考える」、「り災証明書を早く出すためにどのような工夫をすればよいか?を考える」など、多岐にわたっていました。どの問題も防災教育ではこれまであまり取り上げられてこなかった内容だったので、かなり驚きました。

### 3. 異なる立場の人たちの考えを知る

当日の防災授業には、高校生だけでなく地元の市役所の防災担当や企画担当の職員も加わり、高校生・大学生・市役所職員が一つのテーブルでディスカッションをすることとなりました。各テーブルで選んだ問題について自分の考えを出し合い、講師役の大学生が事前に勉強した災害体験者の経験や感じたことを適宜紹介解説しながら進行するというやり方で、1時間半の授業時間はあっという間に過ぎてしまいました。この授業を通して私自身が学んだ事が2つあります。

一つ目は、高校生は極めて理にかなった考えを持っているということでした。例えばり災証明書の早期発効のためには「調査の方法や基準を統一して市役所職員以外の人にも手伝ってもらう。建築業者の人たちも動員する。被災者が自分で被害の様子をiPhoneで撮影し市役所に送る。」などの意見が次々出てきました。行政の縦割りや現行法制度による限界など大人の理屈で不可能とあきらめてしまうのではなく、目的を達成するために何をすべきかを、柔軟かつ純粋な発想で考えることができるのが、子どもたち・若者たちの持つ能力だと思います。

# 地域コミュニティの 防災力 重川 希志依



写真2 解決が難しい課題でも高校生の柔軟な発想でアイデアが生まれる

二つ目は、年齢と立場の異なる参加者がお互いの意見を知り合うことで、思い込みやステレオタイプの考え方を捨てることができたということです。参加した市役所職員は「高校生や大学生が防災についてどのように考えているのか、これまで知る機会は全くなかった。今日それに触れることができ、ものすごく勉強に

なった。こういう機会はもっともっと増やしていくべきだと思う」と感想を述べていました。



写真3 市役所職員と熱心に話し合う

これまで出会うチャンスがなかった様々な年齢と立場の人たちが一堂に会し、「防災」について自分の考えを述べ相手の考えを聞き話し合う場、これも防災コミュニティの一つの形といえるかもしれません。